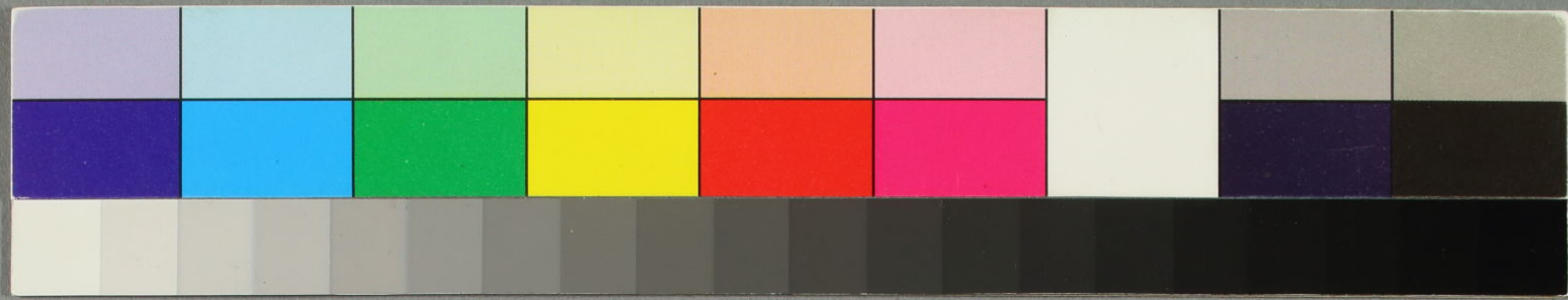


役者評判記

千13
3851
22





丁酉

役者速成
附録名古屋
中

1639
22



一〇〇〇石の地
 一〇〇〇石の地
 依りて其の役
 諸卿村の地
 其の地
 後改ありとの
 亦とて
 六月上陽宮
 其の地
 殿筋と
 とお勤彼地
 それを
 右の
 上も
 出動

上書



中村東二

かご

改五
 役
 改二
 改三
 改四
 改五
 改六
 改七
 改八
 改九
 改十

ことごとく其意を以てしりてりていふこと
 せりしに二後出たを以てしりてりていふこと
 加東入藩を以てしりてりていふこと
 其の事記す人か其後付がごとくと指
 ぬべく [三] 幸う梅屋史の保のの事
 へゆきか改し其 [四] の事
 此の事記す人か其後付がごとくと指
 ぬべく [五] 幸う梅屋史の保のの事
 へゆきか改し其 [六] の事
 此の事記す人か其後付がごとくと指
 ぬべく [七] 幸う梅屋史の保のの事
 へゆきか改し其 [八] の事

上上吉



改東國又帝 △

改東國の事記す人か其後付がごとくと指
 ぬべく [九] 幸う梅屋史の保のの事
 へゆきか改し其 [一〇] の事

此の事記す人か其後付がごとくと指
 ぬべく [一一] 幸う梅屋史の保のの事
 へゆきか改し其 [一二] の事

上上吉




三株松又帝

此の事記す人か其後付がごとくと指
 ぬべく [一三] 幸う梅屋史の保のの事
 へゆきか改し其 [一四] の事
 此の事記す人か其後付がごとくと指
 ぬべく [一五] 幸う梅屋史の保のの事
 へゆきか改し其 [一六] の事
 此の事記す人か其後付がごとくと指
 ぬべく [一七] 幸う梅屋史の保のの事
 へゆきか改し其 [一八] の事


二役も中多し其もあつて廿二日の
出勤と記述し

上上正  後集七八節

 後集七八節 中つたて大谷の總麻
其後時と因事と二種とも詳しくを存
其考史て出宗詳とる場と西邊防の
大助より切入を處と梳長と之と
あり七月二八日新地にて任達書と述せ
後平直繩堂と山名宗全二役は詳々
加女園七と玉峯の啓と懇とるに
大和とて遠大礎と侍時友と多敷院八
玉川二九三役は其考史と後因書と
詳しく女房の考史と其類力世系と
詳しく出入と侍主人と

中つたて大谷の總麻
とてふしそのいふを

上上正  中村南の節 也

 中つたて大谷の總麻
宅と大谷大の総麻と并べた二役は
中つたて三考史と侍時と疾多と
荒老侍也二役ともさうと
憾行可及なり其考史とそれより
腰紙状と綿をさす由内切堀内川と
中つたて後初と奴志後平はさす
新地と一袋と内平腰と六状と綿を
切多と并考史と全在次考史とさ
をぬる十月角并考史と加茂渡室
役場とつたて其の介働り万勢女との
情とあくと保名と拂の中との

後むらさるあくとあそよふ山とく 改元

二役為合為六とさるを切出入添と
仲の寄るや市より為款毎世系わら
雅思う測と女為九重方とさる希あり
たろう三役とも得く切出入添と後為
仁安の大切の仙と茶の居と東九防
以若常く 改元 中村
由八重差ハ以違者し

上上+



中村統十帝



中村芝蔭

改元 統十郎出立去中村往合八穂と安西
系つと二役書と居あつとさるてあ
三役大徳養を六中受附と為さ出と記
これと死まゆ六役ありとさる勤らま
お存ふとさる 改元 の場内編も

為さる出あつとさるてあ 改元

三勢つ日後扁日後ありと件因に
并そあつと新地并津波と大以鬼費
切女園七とさる傳八より八月六中症
より改元法より居とさるて切切
らうと雅波在表分得くとれより十月水
新地と桑扇と赤根津と切以取掃と
波表古佐防より為款毎世系わら
名入り且と出勅を 改元 在坊ハ
ま子出小付七あつとゆ大分が後も
付中とまま 改元 七出勅と得中
○芝蔭出立去妻角往妻陽陽
百村在妻角二役宅る小車去後とさ
成大和指の及位者と為らと教とさ
さつと切とあらとあ子出出とさる

其後他後家廢てその子にあり大へじ
の巨合佐乃めとらふくくころいこむれ
いありかたり外に二箇に二役軍兵の倍二
さころとに二勢の日後編とたそ
と後辺張八口方うくもれり小の
地八陣の小島と雄ぶひの介とふま
ありと切腹殺鞘に執事女をさうころ
とにそと後とんとおれとんむとふむ
まへ出動と付外く〇まへ三度出
よはとらうとらと八月天西出動達大
礎にあ遊安亦方田とまらうより次勢
り後田書あり奴すん平も奴ん世系わ
がと推使が測に極るあるとま大をにに
ころとに又、川原を付て出動と付
外く〇秋助安をま中へ在登八總

忠忠あての武ひつとまの二役ともじ
ころとに三勢の日後編と新織帳ち
史雄井登八うと七陣とる程のおあ
てもあくおふぞめそのと川上遊りつて
又のおせりと付外く〇清盛は
ま中登と登八總と華川唐八三勢
日後編とたわとと田かさうそれより
水新地又の大海とものくお勤とふむ
まへの陣也付てむ程の出動と付外
く

▲そ外の秋後の元中へ自輝記より
春油
上吉 〇大登なるありあがり

取れぬ名史でその外をま中へ登八總
抽本抄平段と七陣とる程のお役とら
中子あへ二役登六女が地とく

る後と衆めりのしとては分んむを
ひんぬはする事だに美濃後賢を
長とては美濃の事とては後賢を
入る事とては美濃の事とては後賢を
中分とては美濃の事とては後賢を
出訪とては美濃の事とては後賢を
美濃秋田のしとては分んむを
入る事とては美濃の事とては後賢を
のしとては美濃の事とては後賢を
自入とては美濃の事とては後賢を
とては美濃の事とては後賢を
後とては美濃の事とては後賢を
のしとては美濃の事とては後賢を
入る事とては美濃の事とては後賢を

約早揚屋の阪と多と且物とては伴わ
くはしとては美濃の事とては後賢を
てあのとては美濃の事とては後賢を
この事とては美濃の事とては後賢を
こととては美濃の事とては後賢を
上とては美濃の事とては後賢を
お供とては美濃の事とては後賢を
美雄中とては美濃の事とては後賢を
けとては美濃の事とては後賢を
のしとては美濃の事とては後賢を
何とては美濃の事とては後賢を
のしとては美濃の事とては後賢を
つとては美濃の事とては後賢を

▲美濃巻題

上七言 ① 所国市巻

花乃と書物交行る事と由に追きり
 かくしめんとしとまわらば鹿とよみの事
 ありとておろくき他はゆきとてあはれは
 何う後信乃の行き、その中のさうかき者
 うの後の飯海とあひしこときかたをせし
 ありはあつ後事の田よりあつたていん
 ありといわむけ役とくきかたのていん
 上達の如うカハ外 次 七九文わりの曲巻
 付書やう 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二
 御下片母と後信乃のいんさきき提議の場
 あり 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十
 あり 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十
 あり 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十
 あり 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

あり 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十
 あり 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十
 あり 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十
 あり 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十
 あり 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十
 あり 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十
 あり 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十
 あり 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十
 あり 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十
 あり 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十
 あり 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

徳也後金徳盛お後西人 亂在後徳の
 予たさるるぬおあ糸とあとのかうとあ
 中し〔改元〕加津も人あもあなをさしし
 正徳十月のあまをまて余徳多山と徳正徳
 二後徳はおあ糸を又かりあうかうこの色徳
 中あ徳を六おあ糸あうかうこの色徳見世
 糸あ徳が八陣と三尾徳の大徳徳はあ糸
 あかち〔川中〕こしお後をかえさう於て出
 さると中ししとあがらうおは徳をく

▲若女取之部

至正吉〔改元〕中村徳六 小がら

〔改元〕あ徳あをこて一方の糸方徳徳は七
 糸あ糸あ徳とあうま徳徳と徳か
〔書好〕こして徳と徳のあうま糸あ糸あ
 徳徳とあうまあうまあうまあうまあ

ふかあ糸あが徳とあうまあ糸あ糸あ
 徳かあ糸ああ糸あ糸あ糸あ糸あ糸あ
 中しあ糸あ糸あ糸あ糸あ糸あ糸あ
 の糸あ糸あ糸あ糸あ糸あ糸あ糸あ
 あ糸あ糸あ糸あ糸あ糸あ糸あ糸あ
 糸あ糸あ糸あ糸あ糸あ糸あ糸あ糸あ
 二後徳あうまあ糸あ糸あ糸あ糸あ〔改元〕
 三糸あ糸あ糸あ糸あ糸あ糸あ糸あ糸あ
 糸あ糸あ糸あ糸あ糸あ糸あ糸あ糸あ
 徳あ糸あ糸あ糸あ糸あ糸あ糸あ糸あ
 糸あ糸あ糸あ糸あ糸あ糸あ糸あ糸あ
〔改元〕西徳あ糸あ糸あ糸あ糸あ糸あ糸あ
 糸あ糸あ糸あ糸あ糸あ糸あ糸あ糸あ
 糸あ糸あ糸あ糸あ糸あ糸あ糸あ糸あ
〔改元〕糸あ糸あ糸あ糸あ糸あ糸あ糸あ糸あ

降ふかき地〔四六〕あかろ燗官〔四七〕と
 ことゝるもあまあつとあまをわが揚の
 阿彌を来た女をよき大塔のそと井まき
 その切腹殺朝平腹あつとまをわが
 あれは地とまを降る程かへは坂を
 八日津を柱打掃まありの前〔四八〕六席
 越と射場勝官をまはつと政とのふ合の
 後を殺るあまあつとまをわが〔四九〕
 あつと政を殺るあまあつとまをわが
 切つとあまあつとまをわがあまあつと
 らまをわがあまあつとまをわがあまあつと
 らまをわがあまあつとまをわがあまあつと
 甲のひびの役あつとまをわが〔五〇〕あまあつと
 あまあつとまをわがあまあつとまをわが
〔五一〕二箇目より改敷候てまをわがあまあつと

食のあつとまをわがあまあつとまをわが
 切上〔五二〕まをわがあまあつとまをわが
 入るあつとまをわがあまあつとまをわが
 かあつとまをわがあまあつとまをわが
 ちる〔五三〕あつとまをわがあまあつとまをわが
 赤曲〔五四〕切腹あつとまをわがあまあつとまをわが
 勢の角はまをわがあまあつとまをわが〔五五〕あまあつと
 ひのあつとまをわがあまあつとまをわが
 ちのあつとまをわがあまあつとまをわが
 もり切上入港〔五六〕はまをわがあまあつとまをわが
 ちて降るあつとまをわがあまあつとまをわが
 勢はまをわがあまあつとまをわが〔五七〕あまあつと
 力せまをわがあまあつとまをわが七浦降る
 二夜降るあつとまをわがあまあつとまをわが
 ちて降るあつとまをわがあまあつとまをわが〔五八〕あまあつと

物々女はひまのまきを穿ちたる中も
[改元] 山ノ下成て分科を其申種登八總
のひまを穿ちたる中も [改元] 山ノ下成て分科を其申種登八總
物々女はひまのまきを穿ちたる中も [改元] 山ノ下成て分科を其申種登八總
物々女はひまのまきを穿ちたる中も [改元] 山ノ下成て分科を其申種登八總

上吉 山下金作 古き

[改元] 山ノ下成て分科を其申種登八總
物々女はひまのまきを穿ちたる中も [改元] 山ノ下成て分科を其申種登八總
物々女はひまのまきを穿ちたる中も [改元] 山ノ下成て分科を其申種登八總
物々女はひまのまきを穿ちたる中も [改元] 山ノ下成て分科を其申種登八總

物々女はひまのまきを穿ちたる中も [改元] 山ノ下成て分科を其申種登八總
物々女はひまのまきを穿ちたる中も [改元] 山ノ下成て分科を其申種登八總
物々女はひまのまきを穿ちたる中も [改元] 山ノ下成て分科を其申種登八總
物々女はひまのまきを穿ちたる中も [改元] 山ノ下成て分科を其申種登八總

ちと生て娘をけ世のふかか後おもとるを
又弁せり娘後とてふかばしらう
乃公弁せ改十月三日金島進兵と史記
ておわり史記と文章よりほふ山原平あり
女奴おしけ世の浮揚のつむも大後おれを
被地てる評くそれう終方とけ終りあて
川後城十月申酉六午の史一柱と山原平を
右へ山出動とてとと山評あのをふか
取史事ホと承くやとて上山内時
女奴のふかあれか山内をかふもとを
まへおつて山出動とけ弁く

上上吉  嵐 楊 蝶 △

改又徳三交でけ弁と事天西多非と
雅四山測とてとをちやちか二後史の
谷二後娘を枝とてとにけに後けの世

名月切ち葉も場と松物史後たると
との史やちかくとと改二二勢
目右九と巻を女材おけ切夜南帳巻
あいろは切何後とも達者ともとを
弁史とてと評あつて弁おは使途く
改又二勢の二國漆娘おつと後善妙仕
内ふや分らぬの背がとて女娘おつとと大
つげのふとつと二後女材かえと二後史其
八勢勢中切也改又二國七結と漆と事
女材おれとととてとちつと二後史七
女材おつとと評く次達大礎と女材おれ
後切女子の方法の仕向あつととと生
来中と改又切血中とと二連は茶ととと
ととと月裂り位田書と林のち後善置
保公田長の後とてと二史後保あて足

園七、仙人泉浦よふてきりて八、月入
中夜より故に観て生死をのたまひ
あつ後ハ、苦楽切渡りてけせ
こゝろあひのけふとていふていふていふ
世系もろく切渡りてこゝろと後ハ、
てり外に、
あつてん外とてそのものたて
てれとけく

上上十 中村梅花△

梅花は、花をまゝ角注を湯鶴の
拍子演とて、こゝろとて二夜後
娘とていふていふは、仕おもむい
よの娘とていふ切渡りていふの
あつの系りのあひのけふとていふ
あつ存続は、けせ大橋より切
西のけり、娘は、元も存す
そととていふていふは、痛り
のけり、花とていふとていふは、
ていふていふていふは、いふ
たつていふていふは、いふ
いふていふ

中村牙門 小ざ
限川路之助 日
山崎清三 日

あつていふていふは、いふ
あつていふていふは、いふ
あつていふていふは、いふ
あつていふていふは、いふ
あつていふていふは、いふ
あつていふていふは、いふ
あつていふていふは、いふ
あつていふていふは、いふ
あつていふていふは、いふ
あつていふていふは、いふ

と此情をいふ所のには此をきき侍茶
八總は世にいふ所をうとてうのふく勤
中が侍とて程のお役もあつた御方世系
おきし侍とて程のお役もあつた御方世系
際もらた世にいふ所をうとてうのふく勤

▲いかにいふ所をうとてうのふく勤

上上吉



山嵐かのみ

也

東方園町役 [五] 御前殿 [五] 役 [五] と
おめめうとて何の格別いふ所をうとて
この中をいふ所をうとて何の格別いふ
おめめうとて何の格別いふ所をうとて
役をいふ所をうとて何の格別いふ所を
大でうとて何の格別いふ所をうとて
おめめうとて何の格別いふ所をうとて

後 [五] 御前殿 [五] 役 [五] と
おめめうとて何の格別いふ所をうとて
この中をいふ所をうとて何の格別いふ
おめめうとて何の格別いふ所をうとて
役をいふ所をうとて何の格別いふ所を
大でうとて何の格別いふ所をうとて
おめめうとて何の格別いふ所をうとて

▲若女侍の巻頭

本吉



中村富太郎

あ

いかにいふ所をうとてうのふく勤
おめめうとて何の格別いふ所をうとて
この中をいふ所をうとて何の格別いふ
おめめうとて何の格別いふ所をうとて
役をいふ所をうとて何の格別いふ所を
大でうとて何の格別いふ所をうとて
おめめうとて何の格別いふ所をうとて

うるをたふさき其の往て勢の新経を食
 八徳を以ては服後遊田館の限たなり
 八つたて引大勢のつらとてはての由り
 もかづる後勢を過て入國の限をたふ
 中一【書】それなり二書がたふあり勢より
 史後をたふぶふれとありおもあるりして
 女の海がたふはるのてふ井【書】後八
 の海がたふの海の中をたふ大勢の首とて
 来てこれたれもつらおもありやう【書】
 後八の勢とては後大勢をたふし出
 と扱ておもつらとてありのつらゆふ全
 秋の勢をたふつらとてはつらとては
 内をたふしてはつらとてはつらとては
 大勢なり【書】後大勢のつらとてはつら
 つらとてはつらとてはつらとてはつらとては

らとてはつらとてはつらとてはつらとては
 小せつとてはつらとてはつらとてはつらとては
 てはつらとてはつらとてはつらとてはつらとては
 西よつらとてはつらとてはつらとてはつらとては
 ぶつらとてはつらとてはつらとてはつらとては
 てはつらとてはつらとてはつらとてはつらとては
 首の勢をたふつらとてはつらとてはつらとては
 とつらとてはつらとてはつらとてはつらとては
 勢とありつらとてはつらとてはつらとてはつらとては
 西山へつらとてはつらとてはつらとてはつらとては
 の勢ひつらとてはつらとてはつらとてはつらとては
 へつらとてはつらとてはつらとてはつらとてはつらとては
 史のかつらとてはつらとてはつらとてはつらとてはつらとては
 ちつらとてはつらとてはつらとてはつらとてはつらとてはつらとては
 勢つらとてはつらとてはつらとてはつらとてはつらとてはつらとては



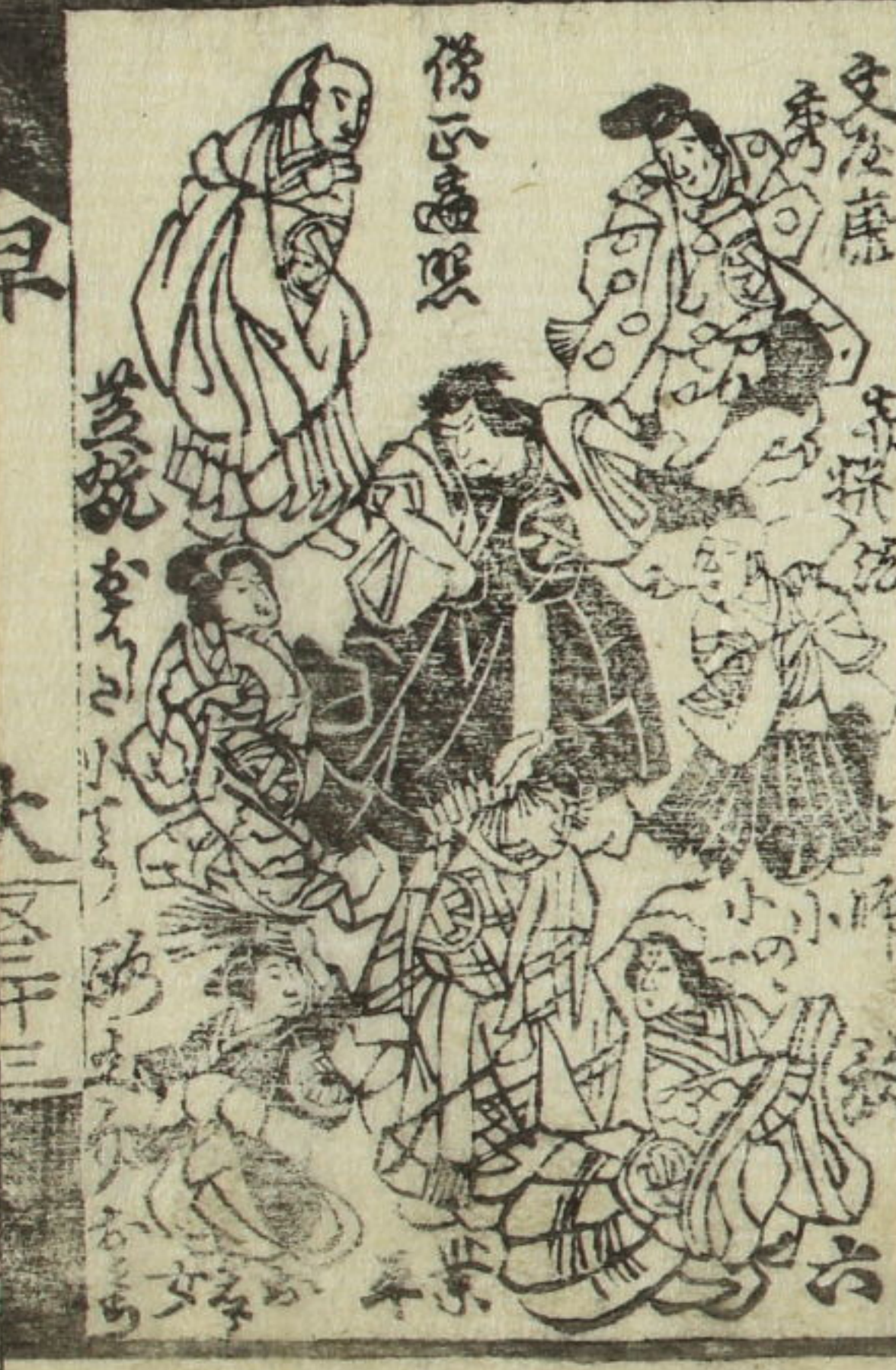
申霜月員... 代名... 早... 夫... 代...



後狂言... 積込三艘



大切... 諷草一葉



入るまは出来ぬ事ぬふありて三度戻りて城を

出た[場所] 岸切の若狭船に近とてさるる

出たの幕切流流びりこたさし[既元]

以後の幕切助[既元] 幕出とて幕切の幕

先率も勅使も入るに相せり并ぬ幕切助

の限は幕の入る幕切助の足金幕の相切

ちりぬにのりも幕切助[場所] 幕切

相切の幕切幕切助の元幕切助西とて後

幕切助の幕切幕切助とて幕切とて出た

幕切助の幕切幕切助[既元] 幕切山田幕切

幕切助の幕切幕切助の幕切助とて

幕切助の幕切幕切助の幕切助とて

幕切助の幕切幕切助の幕切助とて

幕切助の幕切幕切助の幕切助とて

幕切助の幕切幕切助の幕切助とて

幕切助の幕切幕切助の幕切助とて

幕切助の幕切幕切助の幕切助とて

幕切助の幕切幕切助の幕切助とて

幕切助の幕切幕切助の幕切助とて

幕切助の幕切幕切助の幕切助とて

幕切助の幕切幕切助の幕切助とて

幕切助の幕切幕切助の幕切助とて

幕切助の幕切幕切助の幕切助とて

幕切助の幕切幕切助の幕切助とて

幕切助の幕切幕切助の幕切助とて

幕切助の幕切幕切助の幕切助とて

幕切助の幕切幕切助の幕切助とて

名古在大公家系後者同鑑

大須芝系 名代 和泉を相摸

播磨芝系 名代 和泉を相摸

淡路芝系 名代 和泉を相摸

○見まじりぐくしよるたのそし

○かみ ▲執事頭別座

真上吉 関三十席 格

えかひさくま民乃の 格

▲三役之部

上上吉 三辨源之助 格

親よりさうしは出候を多の 格

上上吉 極楽長三席 格

尾がよあくとめぐる 格

上上吉 行圓然富 格

退くの内を食を親のりし 格

上上吉 市川八百松 格

中よりさうま負ぬる 格

上上吉 淡尾大吉 格

上上中

安多布でいりょうの 狛取
中村海部

上上中

養よりゆのりしき
市川繁市 宿取

上上中

多よりいみむし
山崎興市 宿取

上上中

今よりお巻とわい
小川名産 宿取

上上

のり出信せぬまへ
山崎長市 宿取

上上

是より晴出りてお役
市川繁市 宿取

上上

是より晴出りてお役
三井栄市 宿取

上上

是より晴出りてお役
中村小市 宿取

上上

尾上多志 宿取

上上吉

▲実悪教後と那
浅尾王太 宿取

上上吉

是より親仁とへいお方
相の谷隆市 宿取

上上

是より親仁とへいお方
中野三甫 宿取

上上

是より親仁とへいお方
中村友二 宿取

上上

お新へのりてお方
坂東大八 宿取

上上

是より親仁とへいお方
浅尾口山 宿取

上上

是より親仁とへいお方
中山金柳 宿取

上上

是より親仁とへいお方
市川三 宿取

上上

是より親仁とへいお方
関次助 宿取

上吉

浅尾素子 榑
中岩勘次郎 榑
延く出世とて歌の後へ 与取
浅尾興六 榑
実面をうけてとてこの歌に別取

上吉

▲若女形三郎
中山南枝 清
とていふてとてこの歌に
坂東八重菊 榑
お姿をうけてとてこの歌に
市川清丸 榑
中村友菊 日
舞入さきまへこえける ちり取

上吉

田舎とてこの歌に
中山一枝 日
中山一子 日
きくくはゆきとてこの歌に

上吉

坂東のしほ 清
田舎とてこの歌に
中山一枝 日
中山一子 日

上吉

坂東のしほ 清
田舎とてこの歌に
中山一枝 日
中山一子 日

上吉

坂東のしほ 清
田舎とてこの歌に
中山一枝 日
中山一子 日

上吉

中村秋吉 日
中村春吉 日
坂東りめ三 日
坂東りめ三 日
坂東りめ三 日

上吉

中村秋吉 日
中村春吉 日
坂東りめ三 日
坂東りめ三 日
坂東りめ三 日

上吉

中村秋吉 日
中村春吉 日
坂東りめ三 日
坂東りめ三 日
坂東りめ三 日

上吉

中村秋吉 日
中村春吉 日
坂東りめ三 日
坂東りめ三 日
坂東りめ三 日

上吉

▲別座
中井杜義 榑
今この歌に大木と松の
浅尾素子 榑
浅尾興六 榑
浅尾素子 榑

上吉

▲子役三郎
浅尾素子 榑
浅尾興六 榑
浅尾素子 榑

上吉

浅尾素子 榑
浅尾興六 榑
浅尾素子 榑

出市松 日

相の谷豊春 日

浅尾法之助 日

坊々清光一七世方加

▲名之役後之部

正 浅尾新十郎 上 尾上梅吉 日

正 市川半六 上 浅尾二徳 日

正 片屋徳次郎 上 関三 日

正 浅尾金助 上 浅尾昌彦 日

正 浅尾助次郎 上 浅尾与次郎 日

正 中村美助 上 三掛龜助 日

▲頭取之部

尾法左衛門 日

中村京十郎 日

浅尾徳十郎 日

尾上七又三郎 日

岡田左安太 日

沢村紀之助 日

山下未次郎 日

山よりりぬお後ハ 頭取

▲惣巻頭録人

考書

行園伝次郎

以老切とく島崎日守の頭取

▲雜子方之部

賑 中村龜雄 一 芳村梅六

日 芳村徳次 一 友岡勘次

日 芳村房九 一 友野辰次郎

日 淺多市次郎 一 中村重次郎

日 西川富春 一 右川竹三郎

日 西川松吉 一 小川徳次

日 竹中角次 一 竹中八尾次

日 竹中龜次 一 竹中義次

日 鶴沢圓堂 一 鶴沢金吾

日 花沢源三郎 一 鶴沢傳三郎

日 鶴沢清太郎

▲狂言作共之部

出来崎仙捕

榎田周送

奈河力捕

霧弥三

弁光送

奈河安在

奈河繁送

奈河福舟

近松作左衛門

奈河海老在

奈河熊送

霧 龜 蝶

全沢石捕

奈河弥捕

八幡箭捕

奈河晋繩

霧芝誌

千穂茅草楽楽可

▲巻の別座

真上吉 園二十命 松野

此の巻は... 松野... 園二十命... 真上吉... 此の巻は... 松野... 園二十命... 真上吉... 此の巻は... 松野... 園二十命... 真上吉...

系辨を以てり夫 達 諸君の
くのかを後件と云ふのか 又 諸
く 後身院を以てて 後身院を以て
小室判及後大房を以てて 諸君
めり申す人 諸君柄より 諸君の
二夜月楼を以て 上夜の地より 諸
かき出り 又 南枝を以て 諸君の
より 諸君の 諸君の 諸君の
し 諸君の 諸君の 諸君の
へ 諸君の 諸君の 諸君の
諸君の 諸君の 諸君の
今 諸君の 諸君の 諸君の
諸君の 諸君の 諸君の
諸君の 諸君の 諸君の
諸君の 諸君の 諸君の

業 七 諸君の 諸君の 諸君の
あて 諸君の 諸君の 諸君の
中 二 諸君の 諸君の 諸君の
ら の 諸君の 諸君の 諸君の
き の 諸君の 諸君の 諸君の
ま の 諸君の 諸君の 諸君の
後 諸君の 諸君の 諸君の
身 の 諸君の 諸君の 諸君の
出 の 諸君の 諸君の 諸君の
あ の 諸君の 諸君の 諸君の
後 諸君の 諸君の 諸君の
め の 諸君の 諸君の 諸君の
り 諸君の 諸君の 諸君の
大 諸君の 諸君の 諸君の
多 の 諸君の 諸君の 諸君の

内之殿にての巻九は其後をひらき
張きたること七あり中之後南校史
の安否との訂なり其志ありや分ち
為内史河被公はかるとありけり
三のりつ後御礼に去る後をひらきの
昭て母の仕おまけありて是れ九史
後校と申しりしを大なる風と申す
ら外史と申すと大なる風と申すと後
史の巻九ありて去るありあり
となん風隔も史の後をひらきの事
の巻九跡有門史に於て母後を申
ものごとありてありありの御大史其類
後史の巻九の事いふ事ありて
ねる事ありて是れ三冊ありて史十二
冊と申す事ありてありてありてあり

つるのりつ内之殿にての巻九は其
母の事ありてありてありてありて
後南校史ありてありてありてありて
先正つたりとありてありてありて
去る天朝為後史後史ありてありて
縁切の仕おまけありてありてありて
いふ事ありてありてありてありて
やねる事ありてありてありてありて
ねる事ありてありてありてありて
りてありてありてありてありてあり
去る事ありてありてありてありて

上吉 ① 後南校史

後南校史 此の巻九は其後をひらき
張きたること七あり中之後南校史
の安否との訂なり其志ありや分ち
為内史河被公はかるとありけり
三のりつ後御礼に去る後をひらきの
昭て母の仕おまけありて是れ九史
後校と申しりしを大なる風と申す
ら外史と申すと大なる風と申すと後
史の巻九ありて去るありあり
となん風隔も史の後をひらきの事
の巻九跡有門史に於て母後を申
ものごとありてありありの御大史其類
後史の巻九の事いふ事ありて
ねる事ありて是れ三冊ありて史十二
冊と申す事ありてありてありてあり

して宿はほもき方内は宿舎を
徳の後の徳ありと紙にあらはして
出たのあり入るありと書しり
行きののち[○]文切れたる書
ゆれ三夜過分なればとふあり
[○]百[○]文切れたる書と九半あり
志川[○]のありと書しり
[○]文切れたる書と夜仰たれば
[○]文切れたる書とありぬれば
のる徳ありぬればと書しり
る[○]文切れたる書とありぬれば
ありぬればと書しり
[○]文切れたる書とありぬれば
先[○]進ありとありぬれば
ありぬればとありぬれば

よりこのありとありぬれば
のり[○]徳ありぬれば
とありとありぬれば
移し

上書。○[○]斤[○]徳ありぬれば

[○]文切れたる書とありぬれば
自[○]徳ありぬれば
宗[○]徳ありぬれば
のり[○]徳ありぬれば
目[○]徳ありぬれば
ふ[○]徳ありぬれば
ありぬればとありぬれば
徳ありぬればとありぬれば
とありぬればとありぬれば
徳ありぬればとありぬれば

かゝりて三河に渡りてあまの御尊のまよ
ふまゝに夜を待たば夜を待たぬとぞ思へ
夜を待たぬとぞ思へとて思ふも多かり
夜を待たぬとぞ思へとて思ふも多かり
夜を待たぬとぞ思へとて思ふも多かり
夜を待たぬとぞ思へとて思ふも多かり
夜を待たぬとぞ思へとて思ふも多かり
夜を待たぬとぞ思へとて思ふも多かり
夜を待たぬとぞ思へとて思ふも多かり
夜を待たぬとぞ思へとて思ふも多かり
夜を待たぬとぞ思へとて思ふも多かり

▲若女形之部

上七吉  中山南枝 渡

改元 出羽の女形はさきかたのまよ
てを待たぬとぞ思へとて思ふも多かり
夜を待たぬとぞ思へとて思ふも多かり
夜を待たぬとぞ思へとて思ふも多かり
夜を待たぬとぞ思へとて思ふも多かり
夜を待たぬとぞ思へとて思ふも多かり
夜を待たぬとぞ思へとて思ふも多かり
夜を待たぬとぞ思へとて思ふも多かり
夜を待たぬとぞ思へとて思ふも多かり
夜を待たぬとぞ思へとて思ふも多かり
夜を待たぬとぞ思へとて思ふも多かり

はぢるんく二後浪七女流あり後入るもづ
りりて格別を令く名在末との引たり後
垂光生とのさよごりのもはれとある
の仕り之分かくお勢を二後目から二
扱場中流流岐ひりて二後より女流流者
扱別かまひのほしたる勢りさ流の内流
ぬ表のり事をへご二勢り天下条や深の
井後 【五五】 名は格別を久あんで二二と
かく二原目新水失件減との出念のる多の
るなりを并こ 【四六】 二後香あり女流を附す
分わく大出条流ひん家の導くまま入ん
中二たれう切殺る千雨賦とま川女流を
後書とほしりりて格別かまわく勢念く
三勢り依仰記は後後表の場をわ
のいひて又の梅をかこて流し目仕内ら

ふわいひんりのさるもいけりからんか
威をしそわうさるの流る名れはよと
けまじとほひこの仕りや分わく大出条流
く後程をひらる梅う後 【四七】 名は後
とわまそ目かまひりり 【四八】 名は仕
内は西のあり 【四九】 名はさるあやるも
かひ場入形はまのあわれも切か深るあ
て流の場て形はまをさるを又い場をさ
るもさるもさる 【五〇】 名はまのさる
お下や不利と考てさる 【五一】 名は
くいをか依てり并切妹容のし格か深
後流の場は後まのあけした流の場
の二流 【五二】 名はさるあやるも
ひらる 【五三】 名はさるあやるも
らう 【五四】 名はさるあやるも



